

山河を染める思い出の桜

鈴鹿山脈を借景に、うぐい川の兩岸にソメイヨシノが立ち並ぶ、鮎河の桜。いまや、湖南地方で随一の桜の名所と称されるが、意外にもその歴史は浅い。初めて植樹されたのは、三上六所神社の屋根が葺き替えられた昭和32年。以来、地域の人々によって植樹と保存活動が続いてきた。

61年間で700本 地域で守り育てる桜

暖冬といわれるなか、めずらしく着雪した2月上旬。雪道をおそるおそる、黒滝の土山漁業協同組合へと向かった。道中、青土ダムからうぐい川にかけての土手に、延々と桜の木が立ち並ぶ。「鮎河の千本桜」と呼ばれ、近畿でも屈指の名所だ。厳冬期、凜と伸びた枝が風雪に耐える姿も美しい。

「今年は降らへんと思うけれど、やっぱり積もりよったね。ここらは、水口に比べたらよう積もるから」と迎えてくれたのは、土山漁業協同組合の代表理事組合長を務める三上守さん。漁協のほか、羽ばたけ鮎河自治振興会、鮎河のさくらを守る会の会長を兼務している。

鮎河の桜の始まりは昭和32年。三上六所神社の屋根の葺き替え工事を記念し、最初の20本が植えられた。昭和50年代中頃からは、鮎河小学校の卒業記念として植樹が始まる。うぐい川の土手が埋め尽くされると、野洲川沿いにも範囲は広がった。平成14年からは、同校の入学記念でも植えられるようになった。

桜は腐朽病害に弱く、異変には素早い処置が求められる。いつしか、地域の有志が世話を始めたのが、鮎河のさくらを守る会の始まりだ。最初の植樹から数えて61年、代替わりしながら桜を見守ってきた。その間に植樹された数は700本以上にも及ぶ。「毎年、剪定したり、たまには若木に肥料をあげなアカン。とくに、若芽は鹿の好物

で、よう食われてしまう」と三上さん。翌週に剪定すると聞き、現地を訪ねることにした。

危険が伴う剪定作業 担い手不足の現状

2月16日は、朝からあいにくの雨。「雨天順延というてしもたから、今日は集まらへんかな」と苦笑する三上さん。それでも、うぐい川公園にメンバーが少しずつ集まってくる。小雨の中、作業が始まった。

剪定の対象となる枝は、主にてんぐ巣病の発病部。カビや細菌を病原として、発病部から小枝がたくさん生える。花芽がつかず、葉も貧弱になるうえ、樹木の育成に悪影響を与えてしまう。見慣れた

くると、素人でも簡単に見分けがつく。

手の届く範囲は高枝切りを使い、残った枝は高所作業車を使って切り落としていく。桜は土手の傾斜部に植えられており、無理な作業は禁物だ。例年なら、足元は雪に覆われているという。

鮎河のさくらを守る会には86人が在籍しているが、高齢化と過疎化の影響から、作業に加わるメンバーも年々減っている。近年は60〜70代を中心に、20人ほどが作業に当たる。桜は増え続けたが、担い手はますます減るばかりだ。

しかし、鮎河小学校は平成30年3月をもって閉校を余儀なくされたため、これ以上、桜が増えることはない。「わしらの時分、一学年で

45人おったからね。小学校全体で200人以上おったやろな。あの頃は、野洲川ダムの第二期工事ややってきた作業員の家族やらで、ようけ子どもがおったよ」と振り返るのは、御年79歳の田中興八さん。となり町には、昭和43年までマンガンを産出した弥栄鉱山(土山町大河原)もあり、当時の鮎河はにぎわっていたという。

故郷への深い愛情を 日々の活力に変えて

現在、鮎河には217世帯、556人が暮らす(平成28年度統計)。普段はのどかな里山だが、桜の開花期になると大勢の観光客が詰めかける。例年4月中旬に開催する

『咲くや鮎河さくらまつり』では、付近一帯で大渋滞が発生する。近年は、外国人観光客を乗せたツアーバスも増えた。

こうした混雑を解消するため、鮎河のさくらを守る会は沿道の交通整理も担う。「地域活性化の思いで続けてはおるけど、なんにせよ人手が足りん。できたら平日に見に来てくれるとありがたい

なあ」と三上さんは呟く。それでも、地元の人々が植えた思い出の桜を大切に守り続けているのは、故郷への深い愛情があるからだ。

鮎河は標高が高いため、市街地から1週間ほど遅れて開花する。今年も清らかな水面が淡紅に染まるだろう。桜を見に立ち寄る際は、地域の人に感謝の心を忘れな

鮎河の千本桜

甲賀市土山町鮎河 周辺

【公共交通機関】
JR草津線 貴生川駅からバスで40分

【駐車料金】
普通車:500円/バイク:200円
開花期間中の駐車料金(うぐい川エリア)は、鮎河のさくら保全環境協力金に充てられます

【問い合わせ】
0748-60-2690(甲賀市観光協会)



1・2/てんぐ巣病の発病部と若枝を切り落としていく。危険が伴う重労働だ
3/てんぐ巣病の発病部。桜の木2〜3本あたり1箇所は発病している。人手が減り、700本すべては剪定しきれない



三上六所神社の前の歩道橋からの風景。写真右側の土手に、最初に植樹された木々が並ぶ



2月16日、雨天にも関わらず剪定作業に参加した皆さん。中央が会長の三上守さん。会では、鮎河地区の700本を管理する